

⑩ 『仏説密跡金剛力士經』卷第二・五

卷第五「治承三年^{大正}八月四日京清水寺書畢 筆師円順」

「於清水寺以法勝寺本一交了 円慶」

・ 『仏説菩薩夢經』卷下

・ 『仏説菩薩藏經』卷上

・ 『大方等善住意天子所問經』卷四

・ 『大宝積經』

・ 『仏説宝髻菩薩所問經』卷上

・ 『仏説毘羅三昧經』卷上・卷下

・ 『摩訶般若波羅蜜多經』卷第一・二・四

卷第一「治承三年八月十日巳日許書寫畢 於清水寺以法勝寺本」

・ 『浄度經』卷第二・三

卷第三「治承三年^{大正}八月七日清水寺書寫畢 以法勝寺本一交了 永芸之」

『京都妙蓮寺藏』松尾社一切經』より抜粹。

⑪ 『新訳般若波羅蜜多心經』

「以法勝寺御本一交了」

『金沢文庫目録』より抜粹。

○愛染王 一卷一帖 二九八

写

建長四年十一月廿八日子時書了於法勝寺西門

法雲寺執筆肥前公生年廿五歲

○舍利略行法付大師十八道次第 一卷一冊 二三

写 寂澄手沢本

印聖上人御本

建長四年八月廿五日酉時於法勝寺西門

法雲寺書写了

筆師肥前公

『興福寺典籍文書目錄』より抜粹。

明本抄 第十三 一帖 文永八年写

(本奥書) 建長七年乙卯六月二十五日於中川地藏院本堂馳筆了昨日初預法勝寺御八講証義之御請自愛無極今朝又開東

大寺之門戸喜悦有余於今者且為諸宗之稽古且為二口之二出口(略)兩年之微功不空以之擬順次生得脱之良

因此勤全非求名利其志併為証菩提也(略)

右筆華嚴宗末葉法印權大僧都宗性

年齡 五十四

夏臈 四十二

『和泉流秘書』（愛知県立大学附属図書館蔵） 翻刻・解題 四

小谷成子・野崎典子

今回の翻刻は、『和泉流秘書』（愛知県立大学附属図書館蔵）翻刻・解題三（愛知県立大学文学部論集 国文学科 編第五一号平成一五年二月発行）につづくものである。

凡例

- 一、これは愛知県立大学附属図書館蔵『和泉流秘書』の翻刻である。
- 二、底本を忠実に翻刻することを原則とするが、通読の便宜や印刷上の制約を考慮して、次のような処理を施した。
 - 1、原文に句読点はないが、詞章の終わり等に一字分程度の空白をおいた。
 - 2、丁付けは省いた。
 - 3、曲中に付したへ・シテ・アト・——等については、朱書・墨書の区別はしなかったが、朱書の傍書に限って（ ）で括って示した。
 - 4、誤記と判断し得る場合も、修正しないで（ママ）と傍記した。

5、漢字の字体は通行の漢字に改めた。ただし、異体字、略体字は本字にした。合字は開いた。

𠂔↓喜 厂・鳳↓雁 メ↓シメ 𠂔↓より

6、宛字も多くみられるが、そのままとした。

竹類(畜類) 御行所(御教書) 字文(呪文)

翻刻

三本柱

大名 大果報の者天下泰平ニ納り目出度御代なれハ上々の事ハ申におよはす末々ニ至る迄存る儘の折からなれば方々に御普請か賑々敷事ぢや 某も近日普請をせうと思ふて山ニ木を切らせて置た 先のさ者を呼出シ取ニ遣ふと存る ヤイく太郎官者居るかやい 太ハア 有か 太ハア 居るかやい 太御前に 次郎官者三郎官者を呼へ 太畏て御さる ヤイく次郎官者三郎官者召そ 二人何ちや召と言ふか 太中く早ふ出ませい 二人心得た 太兩人の者御前に 二人御前に 汝等呼出ス別の事でない 目出度折からなれば方々の御普請ハおひたしい事てハ無いか 太御意被成る、通り賑敷な事で御さります 二夥敷事で御座り升 二扱夫二付て某も近日普請をしようと思ふて山ニ木を三本切らせて置た 汝等ハ太儀なから往て取て来い 太畏て御さる 三心得ました 三三本有る木を汝等壹人して貳本ツ、持て来い 三人畏て御さる 急て行ケ 三人ハア エイ 三人ハア エイ 二人ハア エイ 三人ハア 何と目出度事を思立てたてハないか 太郎上座 是ハ賑敷成たわいやい 三嬉しい事ぢやナア 太イサ行ふサアく来さしませ 二人心得た 太誠二頼ふ

た御方八年、御立身被成て御目出度事ちやナア、結講な山を沢山ニ持せられて何を被成りよふと儘な事ちや

御目出度事ちやナア、イヤ何角と言内ニ山へ来たト言テ上へ行、誠ニお山ちや、某ハ初メて来たわい

やい、誠ニそふて有ふ、見へ渡た処カミな頼ふた人の山ちや、夥敷事ちやナア、大分材木か出る事ちや

そふて有ふ共、扱とれニある事ちや知らぬ、されハとこ元ニ有る事ちや知らぬ、最そつと奥へ行て見

よふ、いさ行しませ、心得た、心得た、心得た、とくと聞て来れハよかつたニ不念なことをした

定而見る所ニ有ふ、ハア爰に能い柱か有る、定而是て有ふ、三本有柱ニ夫て有ふとも、サア、イ

サ持しませ、心得た、とれ、某から持ふ、早ふ持しませ、是ハ中、重ふて持たれぬ、ちと手伝ふて

くれさしませ、心得た、とれ、爰を持て遣ふそ、是ハ重ひ事ちや、さあ、身共ニも

手伝ふて呉れい、此事く持て居るニ依て手伝ふ事ハならぬ、某もならぬわい、イヤ能い仕様か有

是、斯して持ふと思ふ、是ハよい分別ちや、扱、重ひ事ちやナア、其通りちや、サア、来い

郎より廻ル、心得た、殊の外重ひ木ちやわい、長い物ハ持にくい、其通りちや、上、次郎三

郎如此、ヤイ、何ちや、最前頼ふた人の被仰たを何と聞たそ、何の事ちや、三本の柱を

三人して貳本ツ、持て来いと仰られたそよ、誠ニそふて有た、殊を分て仰られた、是ニハ様子か有ふ、先ツ下

ニ置ケ、心得た、是ハ何としたらハ貳本ツ、持たれふナア、某か合点したサア、そこ

を持て、サア、其通りちや、夫てハ身共か壹本ちや、誠

ニ左右ちや、亦下ニ置ケ、心得た、扱、是は六か敷事を仰付られたナア、頼ふた御方ハ勘考の深い

御方ちや定而分別させふ為て有ふ、とくと思案のさしませ、イヤ思ひ付た、某のする様ニさしませ、兎も角

もせい、此の角、を持てハ貳本ツ、持てハ無か、如何ニもそふちや、是ハ出来いた

サア、心得た、某ハ爰を持汝ハそこを持て、こ、を持事か、中、三人共持、是を只持てハ面白ふ

次郎三郎共ニ、シカ、サア、心得た、サア、来い、心得た、是を只持てハ面白ふ

ない 日出度折からなれハ何そはやし物て行まいか 一段とよからふか何んとはやすそ 三本の柱を三人の者
 共か貳本ツ、持たり是く御覽候へとはやすふ 何と其跡に実もさありやよかりもそふよのとはやすまいか
 是ハ一段とよからふ 早ふはやさしませ 三本の柱をく 三人の者共か二本ツ、持たり 是く御覽候
 へ 実もさありやよかりもそふのよ 三ハヤスニ返目ヨリ拍子三人共カハルく のさ者かはやし物て帰たコリヤ出すハ成
 まい如何にやく 三人 コリヤ御声ちやくハヤシ物ヤア ハヤシ物ヤメル 太郎官者次郎官者三郎官者もよく
 聞ケ三本の柱を三人の者共に貳本ツ、持とは知恵の柱を見ん為能社ハ持たれた 先内江入て鯨の鮓を・ホ・ほふはつて
 諸白を吞ヤレ 扇にてタキ カタヌク 貳本ツ、持たり 是く御覽候へ 兎角の事ハ入まい早ふ内へ持こめ 三人
 是く御覽候へ 実もさありやよかもそふよのふく シヤキリ トメ 主斗ハシリコキシテ小廻リヲシテ正面ノ少し左方ニ
 テトメル 早ふ内へト言時扇開キ壹返廻り亦小廻りシテ留ル三人ハ主ノ跡ニテヲトリ居テ逆ニ棒壹本タケ廻ル三郎上座
 シメイく棒かタケトメル太郎次郎三郎ト入

シテ 大名 アト二人

鍋八撥

モクタイ 当所の目代て御さる 此 所 御富貴ニ付て市数多有中ニ新市をお立被成る、何者ニは寄まい早く参り一
 ノ棚をかさつたる者ニハ永代まんそふ鬮を御赦免被成市司を仰付られやうとの御事で御さる 先此由高札と打ふ 柱ニ
 アト 此辺りニ羯鼓を商売致者て御さる 此所御富貴ニ付て市数多有中ニ重て新市をお立被成る、何者ニハ寄まい
 早、参つて新市をお立被成一ノ棚をかさつた者にハ永代まんそふ鬮を御赦免被成市司を仰付らりやうとの御高札ちや

先急て参つて一ノ棚をかさらふ廻ル 誠二目出度御代ニハ市か市ニ重ると申か此事ちや ケ様の時生れ合せた社幸なれ
 一ノ棚を銚かきりたい事ちや イヤ何角と言内ニ市場ちや 急て参つた故右ニ誰も見へぬ 一ノ棚を銚かきふ棒ニカツコサシシ、申
 其元ニ羯鼓そこの御用ならハ此方江仰られいアまたいかふ夜深な先まとるまふネル シテ 当所ニ住居するわさ鍋売て御
 さる アトノ 通アトノり言 又た夜深ニハあれとも急て参つて一ノ棚を銚ふと存る廻ル 只今こそケ様の商売を致とも市司を仰付ら
 れたらハ行（キシラシ）くハ金欄（トシ）どん子純（トシ）きん錦唐織何ヲ商ふと儘な事ちや 扱（トシ）く広い事のあれからあれ迄市場ちや 一ノ棚
 ハ上そふなトシテアト見ル 何者やらつつくりとして居る きやつか躰を見るにおと、いあたりから来た様ふちや 某か急て来て
 きやつ二一ノ棚を銚らる、ハ口惜イ いや思ひ出したサシアシ、テ鍋シテラ下ニラク シ、申そこ元ニわさ鍋の御用ならハ此方江仰られい
 や ア□サシ足ラ シテネル アト よふ寐た事哉シテラ見ル 是は如何な事ヤイシテくそこな者シテくハアシテくシテく 何
 者ちや シテ 当所のわさ鍋売て御さる 此方ハ殿方で御座る 某を知らぬか シテ シカシテく 羯鼓商売人ちや
 へシカシテく 牛ニくらわれた 目代殿でもお出やつたかと思ふてよいきもをつぶした そちか羯鼓を売なれハ
 某ハわさ鍋を売 夫か構ふ事か シテ そふ言ハそのくまいと言ふ事か シテ 何の退ふ 退たくはそちのけ シテ 目ニ
 物を見するそよ シテ 誰か シテ シカシテく有テ シテ ていと言か シテ シカシテく 悪ひやつ棒テ追のシテニケル シテ 出
 合シテく 目代 何事ちや先まてシテく 兩人 シカシテく シテ 何事ちやシテく 兩人 殿方ト言 シテ 所の目代ちや シテ 目
 代殿ならハ急度一礼申ましょふト言シテ シテ 同断 シテ 礼ニハ及はぬ 目出度市始ニ何事を論する 当所羯鼓商売
 人て御座る 此所名乗り同断言ふ 御高札てハ御さらぬか シテ シカシテく 夫故早ふ参つて一ノ棚をかざつて置ましたれ
 ハあの横着者か跡から参つて棚の先ニ居る 依てのけと申せハ退まいと申ニ依ての事て御さる 急と仰付られて被下
 へシカシテく有テト シテ 殿方で御さる トシカく言 シテ 横着者か跡から参て先ニ居まする私ニのけと申 退まいと
 申たれハあのあけけない棒ですす二わさ鍋を打割ふと致しましたト言 シテ すれハ汝か早いシテ目代 シテ シカシテく有テ
 へよし前後の差別ハ指置れませ此目出度市始メニ鍋などの出よふはつハ御さらぬ 羯鼓ハ兒子若衆わかの持て遊びニも成
 まする あによふな者ハ市末ニ被仰付ませ シテ シカシテく 尤羯鼓ハ兒子若衆わかの持て遊びニも成ましょふか此わ

さ鍋と申物ハ目出度物て供御を調味致まして上々から下々迄參つての上ニこそ羯鼓も入ませうか如何な兒子若衆も
供御をまいらすハ羯鼓八撥もしつころこもおかせられをとがいてはいを追而御さらふと存升る

あカツココケフコラシテの鍋ニも有るかお尋被成て被下

御さる 御子様の御慰ニ進ませう

志しハ嬉敷か請る事ハならぬ

忝も二往天皇の御製ニ高き屋ニ登りて見れハけむり立民の鎌とハ賑わいニけり 羯鼓ニまくる鍋てハ無と仰られて

被下

に進ませう

程シカクトをふれと被仰ませ

か明ぬ最一勝負ト

被下

シカク

夫ハ道よくな

最前から何を借せかを借せと申すニかさぬニ依てつれのふ存ませう

仰日代石之通礼ニハ及はぬ

の鍋をわろふと致ました

カツコ相打煎物同断アト水車ニテ楽屋ル入ルシテ鍋わル南無三宝シナイタリト留ル又ハ数多ふ成て目出度ト

モ留ル

牛馬

目代 是ハ当所の目代て御さる 此所御福貴ニ付て市数多有る中二重て牛馬の新市を御立被成る 何者には寄す一ノ

杭につなくものハ永代まんそふ鬮を御捨免被成市司を被仰付りやうとの御事ちや 先此由高札と上ふコラ札ヲ 打下ニ入ル アト

当所ニ住居する馬口勞て御さる 此所御福貴ニ付て市数多ある中に牛馬の新市をお立被或る、何者ニハ寄まい早

ふく参つて一ノ杭につなく者ニハ永代まんそふ鬮を御捨免被成市司を被仰付りよふとと御高札ちや 先急て一ノ杭

につなこふと存る 誠二日出度御代なれハ市二市か重ると申か此事ちや ケ様な時生れ合ふたこそ幸いなれ 一ノ杭に

つなきたい事ちや イヤ何角と言ふ内ニ市場ちや 急て参つた故ニ誰れも未いぬ のふく嬉敷や 先一ノ杭二つな

こう片ヒサツキツナクテイテ シく申 此所の一の杭にハ当所ニ住居する馬口勞かつないて御さる 御用かあらハ被仰付い ま

たいこう夜ふかな 先まとるもうネル笹座トワキ座ノ間隔ヌキ 持てネル尤作り物前エニラク シテ 当所ニ住居する牛馬口勞て御座る 此所御福貴ニ付て市

数多有る中二重て牛馬の新市を御立被成、何者にハよるまい早ふ参つて一ノ杭二つなく者ニハ永代まんそふ鬮を御捨

免被成市司を被仰付りよふとの御高札て御さる また夜ふかなれとも急て参て一の杭二つなこふと存る道行只今こそケ

様な賤しき売商を致せ共市司を頂戴したらハ行くはきんらんとんす純きん錦唐織何を売ふとま、な事ちや イヤ何

角と言ふ内には是ちや 扱く広い事かな またあれからつツとあれ迄市場ちや 一ノ杭ハ上そふなアトラ 見テ 何者やら寐

て居る きやつか躰を見るにおと、い当りから来たよふすちや 某か急て来てきやつに一ノ杭ヲつなかせてハくちおし

い事ちや 何とした物てあらふそ 思ひ出した 致しよふか有るサシアシニテツクリ物ヲ下ニラクアト作り物フタイノ真中少シアトニ 置是ハソツト下ニラクサシアシニテシテ柱ノ先エユキ

シく申 此所の一の杭ニハ当所に住居する牛馬口勞かつないて御座る 御用かあらハ仰付られいやサシアシ シテネル アよ

ふ寐た事哉シテテラ 見テ 是は如何な事 ヤイクヤイそこな者く ハアくハア、引酢辛ノコトク名乗リ座エ 行両手ヲツキ下ニ居ル ア汝

は何者しや 私は当所ニ住居する牛馬口勞て御さる 此方は殿方で御さる 某をしらぬか 何を存ませぬ 当

所の馬口勞ちやわいはい イヤこ、な者か 目代殿ても御出やつたかと思ふてよいきもをつふした そちか馬口勞

ならハ某ハ牛馬口勞ちや 夫かかまもふ事か ア そふいふハのくまいと言ふ事か ベ 何の退ふ のき度くハそちの
 け ア 己のかすハ目ニ物を見するそよ ベ そりや誰れか ア 身共か ベ 笑 そちか目ニ物を見せたらハこわか
 るふそ ア 己でいといふか ベ ていと言ふたら何とする ア 扱くにくいやつ ベ の ふめく ベ つけく
牛馬を出シ アラソウ シ 誰も無いか 兩人 シ 出合へく 目代シカク 目 何事ちやく先待てく 是は先何とした事ちや
シ 左右仰らる、ハ殿方で御座る 殿方 ア 殿方で御さる 目 所の目代ちや 目 目代殿ならハ急度御礼を申ましよふ
ア 一礼申ませう イヤ ベ 礼ニハ及はぬ 此目出度市始に何事を論するや 目 そちハ何者ちや ハ ハア私は
 当所ニ住居する牛馬口勞て御さる 此所御福貴ニ付て市数多ある中ニ重て牛馬の新市を御立被成る、何者にわ寄るま
 い早く参つて一ノ杭につないた者ニハ永代まんそふ鬮を御捨免被成市司を仰付られよふとの御高札てハ御さらぬか
ハ いかにも其通りちや ベ それ故早、参て一ノ杭につないて御されハあの大ちやく者か跡から参つて私に退けと申
 升かあの様なは急度市末に仰付られませ ハ 心得たヤイくそちハ何者ちや ア 私は当所ニ住居する馬口勞て御
 さる 此所御福貴ニ付市数多多事事中ニ重而牛馬の新市を御立被成る、何者ニハ寄るまい早く参つて一ノ杭をつなく
 者ニは永代まんそふ鬮を御捨免被成市司を仰付らる、との御事てハ御さらぬか 目 成程其通りちや ア それ故参つ
 て御されハあれくあれニおり升大ちやく者か跡から参つて私にのけと申 のくまいと申 それ故の事て御さる
ハ すれハそちかはやいか ア 左様て御さるかよし前後のしや別は差置目出度市始に牛か出ませう様か御座らぬ 又
 馬はしんせうな物て鑄馬マの笠かけの駒くらへ杯と申ていかなる上ツ方の兒子若衆の持て遊ひにも成り升ス 其上馬にも
 目出度景図か御さる あのよふな者は市末へ被仰付ませ 目 成程 其通りを言ふ ハ ヤイく ハ ハア ハ 其
 上馬はしんしよふな物て上ツ方の兒子若衆の持て遊にも成る あの様な者ハ市末ニ置と言ふ ハ 尤馬ハ兒子若衆の持
 てあそびニも成ましよふか此牛ハ田畑をすかせ供御を調味致てそれをまいつてこそ鑄馬マも駒くらへも入ませうすれいか
 な兒子若衆も供御を参らすハおとかいて蠅を追て御さらふと存る 目 其上馬ニハ目出度景図か有ると言ふ ハ 馬ニ
 目出度景図か御されは牛にも目出度景図か御さる ハ 左右あらハ語て聞せい ハ 先あの者から語れと被仰て被下

心得た ヤイ／＼牛にも目出度景図か有ると言ふ程に汝から語て聞かせい 畏て御さる 夫馬ハ馬頭観
音の化身として仏の作る法の船月ツ支国より漢土まで馬こそおいて渡るなれ シウのほくヲ、のハヒツの駒その項羽の
望雲水あんらく山の駕籠まで何れも千里をかける成り 其垣仲ハ旅に立俄に大雪ふり故里に帰らん道をわすれツ、馬を
放ちて其跡をしるへとしツ、帰りしわ馬の徳とそ聞へける 又我朝にてハ名を得しハ雨のむち駒を始として光る源氏の
大将や馬二居ねむる須磨の浦曉なんれう木下やよめなし月毛鬼あし毛源太佐々木か名をあけしハいけ月する墨太夫黒
雲の上二も望月の駒仰せし逢坂の小坂の駒も心して引青馬の節会にも牛のねり入例しなし 仏の前二ハ絵馬を懸け神二
ハ立る幣の駒こま北風にいほふれハ悪魔ハさつと退きぬ 目出度事をきおい駒されは本歌にも逢坂の関の清水に影見へ
て今や引らん望月の駒 とこそあれいつのならいに望月の牛とハよまれた事ハ御座るまいそ 是ハ一段とよふ語た
さあく 汝も語て聞かせい 畏て御さる 夫牛わ大日如来の化身としてげん平織女と聞時は七夕も牛をこそ寵愛し
たまへり いわんや和尚といつし人其身を牛に成りてこそ遺戒の法を見せしむれ きよふといへる賢人ハ王に成れとの
勅を請けうるき事聞そとて詠泉の瀧にて耳をいし水をさへそうふ牛にかわさりし 仏の作る十牛や法の花咲牛の子の桃
林の春は面白や 今ハむかしになり平も牛みつ迄の御契りさこそ心を尽し牛野飼の牛の一声も草かり笛にやまこふらん
されハ有詩に曰風枯木を吹けハ晴天の雨行と 女牛吟する声を男牛聞て月平砂を照せは夏の夜の霜引と 此両牛の吟す
る声を聞てこそ今の世迄も詩にわ引かるれ 又ある歌に浪路わけ都に登るつくし牛草に付てや盛りなるらん 忝も北野
の御詠哥に牛の子にふまるな庭のかたつふり角あるとても身をわたのみそ ヤア今思ひ出したり 一天の君も御車に召
れてハ牛こそ引申せ いつのならいに疲馬の引たためしハ御座るまい 是も一段とよふ言ふた あれにまくる
事てハ御さらぬ 何成とも致そう 馬にまくる牛てハないと被仰て被下 ヤイ／＼是てハ埒か明ぬ 何ぞ勝負ニ
せい 左様ならハ駒くらへを致そう 是ハ一段とよかるふ ヤイ／＼是てハ埒か明ぬニ依て何ぞ勝負ニせい
と言へハきやつハ駒くらへをせうと言ふ そちもするか そりや成り升まい とわ何とした事ちや 馬て
こそ駒くらへか成ませうすれ 牛て何と駒くらへか成る物て御座る それハ最前言ふと口か違ふ そちハあの者と

勝負ならハまくる事てハないと言ふた 是をせねわそちかまけちや 是非に及ませぬ 牛と成り共致そう 急
 て駒くらへをせい 畏て御さる 二人共ノル そなたか馬に乗たなりハよいか某か牛に乗たは不調法な物ち
 や そふもおりない 声をかけて三度目の声てかけさせうそ 一段とよかるふ 何ちや
 ハイくく シくく させいホヲセイく 勝たそく ヤイく 何ちや お
 そ牛も淀はや牛も淀といふ程にあさつての今時分迄にわいきつこふそ 勝たそく 勝負ハ知れぬそく

ヘン廻りカケ入色、シヨウアリアト左リニ手綱持右に扇ヲ持馬のコシタ、キツヨウ馬ヲ追入ル廻リ無ニ又タニ入カヨシ
 シテ牛ヲムリニヒキ出ステイ又扇ニテコシタ、キラクレテアトノ跡ヘツキ舞台ノ中江廻ル逆ニ廻ルハシカ、リエ見透ヤイト言ナリ

シテ 狂言上下 アト同断 目代 長上下

竹にシテハ黒たれ アトハ白たれ



如此竹ニ掛ケホラシ
 布ニテク、ルナリ

今参り

かくれもない大名 ケ様ニくわハ申せ共召仕ふ者ハ只壹人一人てハ余りつかひたらぬニ依て新座の者をあまた
 か、よふと存る ヤイく おるかやい ハア あるか ハア 居たか 御前に 汝呼出ス別
 の事てない そち壹人てハ余りつかひたらぬニ依て新座の者をあまたか、よふとおもふか何と有ふ 是は一段とよ
 ふ御さりましょふ 夫ならハいかほとか、よふそ 夫ハこなたの御心まかせて御さる 何ちや身かま、し

やといふか 太 左様で御さる 某の思ふハ大名のせかゝ置ふより一度二とつと八千人斗りもか、よふか
太 是は一段とよふ御さりませうかそれでハ置処か御さり升まい 置所こそあれあの裏の野山にはなして置ふ
太 此方も思召ても御らふせられい 人間か牛馬杯のよふに野山にいらる、物ては御さりませぬ 野山ニハ居まい
なナア 太 左様で御さり升ス べ それならハへらいて五百人置ふか 太 へりもへりましたか夫てハかんにんか
つ、きますまい べ 何か 太 かんにんて御さる べ かにんく べ 所言ふハはみ物の事か 太 左様で御さ
る べ それこそあの沢山な水を吞せておけ 太 人間か水斗り吞ふて生て居らる、物てハ御さりませぬ べ 何れ水
斗り吞ふていまいなあ 太 左様で御さり升ス べ 夫ならハへらそふく 太 よふ御さりましよふ べ くわつ
とへらいて二人置う 太 あの二人りな べ そち共二と言ふ事ちや 太 是は一段とよふ御さりませう べ 左右あ
らハ汝ハ太儀ながら今から海道へ居て独りもひとりからと芸能ふのある理根そふな者を見すましてか、へて来い 太
畏て御さる べ 急て行ケ 太 ハア べ エイ 太 ハア べ エイ 太 ハア べ エイ 太 ハア べ 扱く
一段の事を仰付られた 先急て参ふ 誠二只今迄ハ某壹人て御使のおそふしのと云ふてしんろふを致た 新座の者か見
へたらハ行くは樂をも致そうと存て此様なうれしい事ハ御さらぬ イヤ何角と言ふ内に海道ちや 先此処に待合て
居て似合しい者も通らハ言葉を懸同道致そうと存る 箱座エ 参り 是ハ坂東方の者て御さる 某国元て奉公を致しつ
くいて御座る 又都は人の心もやさしいとやら申二依て此度都へ登り似合敷所もあらハ足をもと、みよふと存る 誠二
奉公人程面白い物は御さらぬ 国元二居るかと思へは都へ登り此様な面白いさきよい事ハ御さらぬ 太 イヤあれへ
一段の者か参つた 言葉を懸ふ のふく のふそこな人 参り ハアこちの事て御座るか 太 如何にもそなたの事ち
や そつしなからとれからとれへ行かし升 参り 某ハ奉公の望あつて都へ登る者て御さる 太 夫ハ幸ちや か、よ
ふ物を 参り あの此方かや 太 イヤく身共かか、ゆると言ふてハない 某の頼ふた御方ハとつと御大名ちや
是へ申ておましよふと言ふ事ちや 参り 夫れハ忝ふ御さる それこそ望処て御さる 何卒きもを入て被下 太 夫な
らハ今からても来ておくりやらふか 参り 何時からなりとも参りましよふ 太 夫ハ一段ちや左右あらハイサおゆき

やれ 参り 何か扱案内の為こなたからお行きやれ 太 身共から参ふか 参り 一段とよからふ 太 さあくおゆ
 きあれ 参り 心得ました 太 誠二ふと言葉を懸て御さるに早束同心の召れて此様な悦はしい事ハ御さらぬ 参り
 袖のふり合せも他生の縁とやら申か此事てかな御さらふ 太 其通りて御さる 扱其方の国ハとこ元て御さる 参り
 坂東方て御さる 太 坂東方と聞けハ奥ゆかしい 何も芸わ御さらぬか 参り 是ばし芸て御さらふか 弓まり庖丁碁
 双六馬のふせおこしやつと参つた杯を覚へており升 太 扱く其方ハ万能に達た人ちや 若シ秀句ハおしやらぬか
参り 夫ならハ得参り升まい 太 とわ何とした事ちや 参り 参らぬ先からしんくなそ被仰てハ迷惑て御さる 太
 イヤくそれハ其方が聞様かわるい しんくてハない 頼ふた御方は殊の外秀句すきちや 秀句こせ言葉なそハお
 しやらぬかと言ふ事ちや 参り 左様な事ハついに申た事ハ御さらぬ 太 何と教へたらハおしやらふか 参り なら
 ふたらハ得いわぬと申事ハ御さり升まい 太 そふあらハ一ツ二ツ教へて進上そ 参り それハ忝ふ御さる 太 惣し
 て頼ふた御方ハ新座の者を今参りとお呼被成る、其方が御出やつて有ふならハ今参りあれへおりそへ是へおりそへと
 被仰りやう時其方かおしやりよふわあれへ是へと御しよう候得共御座敷を見れハやふれまとおしやれ 参り 心得ま
 した 太 其心わと御尋被成たらハ居所か候らわぬと御しやれ 参り そう申せハよふ御さるか 太 中く 又今参
 りくあれへ是へ早ふおりそへとふおりそへと仰らりやうなれハあれへ是へと御状候へ共判官殿の思ひ人とおしやれ
参り 某ハ思ひ人てハ御さらぬ 太 イヤく其方を思ひ人と言ふてハない しづかに参ふなそといわふ為ちや 参
り 存せぬから面白そうな事て御さる 兎も角も其方を頼み升ス 太 其段なそつとも氣遣ひおしやるな 身共にまか
 せておかします 参り よいよふにたのみます 太 心得た 参り してほとハ遠ふ御さるか 太 イヤ何角と言ふ内
 に是て御さる 参り 是て御さるか 太 其方ヲ同道致た通り申上ふ程に先それニ待しませ 参り 心得ました 太
 頼ふた御方御さり升か シ イヤ太郎官者か戻たそうな 太 御さり升かく シ 戻たかく 太 御座り升
 かく シ 戻たかく 太 御座り升かく シ 太郎官者 太 ハア シ 戻たか 太 只今帰りました シ
 やれく早やかつた して新座の者をかへて来たか 太 一段の者をかへて参りました シ それハ出来かいた

とれ二居るそ 御門前に待せて置ました ヲ、それ大名ちやと言ふ物を 夫ハ私か心得て申ました
 何言ふた 左様で御さる それは出かいた 惣して奉公人ハ初メある事か後迄あると言ふ きやつか聞く
 様にくわヲ言ふ程に汝は大勢にこたへい 心得ました ヤイ 御前に
 其机木をくれない 畏て御さる 机木 何と今のわ聞ふそナア 何か大キ
 イ御声で御さる程二定而承りませう あれへ往て言ふわ頼ふた者おりふし広間へ出た これへ出て目見をしよふす
 お目か参つたらハ早東御けんぞうて有ふす 又御目か参らすハ五日十日逗留の事も有ふなと、言ふて汝か分てふかから
 せい 畏て御さる のふくお居やるか 是二おり升る 何と今の御声を聞しましたか お大名
 程有つて大キイ御声で御さる 頼ふた御方おりふし広間へ出させらる、あれへ出て御目見へをおしやれ 御目か
 参つたらハ早東御けんそふて有ふス 又御目か参らすハ五日十日逗留の事も有ふ程にその分心得て御出やれ 心
 得ました つうとお出やれ ハア ヤイ 御前に 此度奥よ
 り引登せた五拾疋の馬共を引出し湯洗をせいと云へ 畏て御さる 又表の侍衆ニもた、いらりよふより広間へ
 出て矢の根なりともみか、れいとナア ハア ハ、アけふハよい天気ちやナア 左様で御さる 暮か
 よからふ いつれもまりをめさりやう程にか、りのそふしをして水を打てとナア ハア エイ 新者の者
 きやつか 左様で御さる 先ハ利根そくなやつちや 某か目か行とちやつと立たわ出来いたナア 左
 様で御さる 乍去見かけとハ違ふてとつとどんな者かある者ちや 心はへを目てつかふて見よふ 是へ出よと言
 へ 畏て御さる お居やるか 是におり升 そなたの心はへを目て遣ふて見よふと被仰る、あれへ出
 さしませ 心得ました 新座の者 シテ顔ヲ上ケル参りタツシテ顔に付テワキ柱エ行クシテウツムク参り下
 ニナル又面上ケル参りタツ真中マテユキシテ正面キル参りアシトメル面引参りクハエヨル面ヲタス参り跡エヒサルシテ
 ウツムク参り下ニナル又アヲヌク参りタツシテ目付柱エムク参り面二付目ツケ柱エ行ウツムク下ニナル如此二三度シテ
 笑ウ参り一ノ松エ行クナリ ヤイ 今のを見たか某の目の行先へちらり 笑りこんなやつちやナア

左様で御さり升 扱きやつか国ハとこちや 坂東方ちと申升 坂東方と聞わ奥ゆかしい 何も芸ハな
 いか 路して承りましたか弓まり庖丁碁双六馬のふせおこしやつと参つた杯を覚へて居ると申升 あのきやつ
 かや 左様で御さる 扱く 万能に達たやつちや 乍去いらぬけいかあるいやい 何れも御重宝かと存
 升 某わ馬ハ持たすゑのころをとらへてふせおこしをさせうか 申く聞升スく ヤイく ハ
 ア 馬のふせおこし重宝ちやなあ 御重宝で御さります のふて叶ぬものちや 左様で御さる
 扱きやつハ秀句ハ言ぬか 是も路して尋ましたか成程申と申升 それハ一段ちや 扱あれへいていわふハ
 行くハ名を付ふすれ共当分な今参りと呼ふ 秀句を聞ふ程に是へ出よと言へ 畏て御さる のふく行くハ
 名をも付ふすれとも当分な今参りと御呼被成る、又秀句を聞ふと被仰る、あれへ出さしませ 心得ました
 つうと御出やれ 参りハア 今参り 今参りく あれ江おりそへ是へおりそへ 参りあれへ是へ
 と御定候得共御座敷を見れハやふれまとも やふれまともく面白そふな事ちやナア 左様で御さり升
 心を尋ふ よふ御さりませう やふれまとのこ、ろハ如何ニ 居所か候らわぬ 居所か候らハぬ
 笑 ヤイく汝わ此心か合点か行まい きやつか某の前へ初而出てこ、に居よふかかしこに居よふかと思ふてやふれ
 たまとを寄せ合して居所か候らハぬハ出かいたナア 左様で御さる きやつか腹中ハ広そふな 最そつと尋ふ
 よふ御さりましよふ 今参りくあれへ是へ早うおりそへとふおりそへ 参りあれへ是へ早うとふと御錠候
 得共判官殿の思ひ人 又くわした 笑 思ひ人の心わいかに 武蔵坊弁慶 ひさりおろく 何と
 いたしました 何と、は今のを聞ぬか 判官殿の思ひ人と言ふたに依てしづかに参ふなそといわふかと思ふて古へ
 の静御前の事か思ひ出されて目の前に見ゆるよふに心もほそふたへかたのふなつた所に武蔵坊弁慶あの色の黒い弁慶と
 ほう官殿のいつおちきりやつた事か有る やくにたくぬとつと、いなせ 心得ました のふく今の様な
 そ、ふを言ふ物ておりやるか 参り私も随分言わふとハ存升れ共殿様の御いせいにおそれ得申さななた 此後ハ如
 何二も答へませうと被仰て被下 心得た申上升 何事ちや 随分申そふとハ存升れ共頼ふた御方の御いせ

いに恐て得申ませなんだ 此後ハいかよふ二も答へませうと申升 シ 是ハ尤ちや 惣して大名の前へ始めて出てハ物
か言にくいと聞た きやつかゑほしかこひた形りちや 烏帽子に付て尋る事かある 是へ出よと言へ 太 畏て御さる
ヤアのおふく 其方の烏帽子かこひた形りちや ゑほしニ付て御尋被成る、事か有ると被仰る、あれへ出さしませ
参り 心得ました 太 つうとお出やれ 参り ハア 太 今参り シ 今参りく 参りか着たる烏帽子ハほくらにそ
似たる 参り 夫ハさも候 中に壁をぬつた シ ひさりおろく 太 何と致しました シ 何と、ハ今のを聞かぬ
か きやつか烏帽子かちんしゆほこうにも似たに依て中に神をいわふたなそといわふかと思ふたれは中に壁をぬつたり
あのよせきも無ひ烏帽子の内ニいつそう作をして壁をぬつた事か有る やくにた、ぬやつちやとつと、いなせ 太
心得ました シ ヤイク 太 ハア シ 水てもはましたらハ取りかへしていなせ 太 畏て御さる のふく一
度ならず二度まで今のおよふな鹿相な事をいふと言ふ事か有る物ておりやるか 参り 頼ふた御方のよふ二物をありおる
様に被仰てハ得こたへませぬ 私の国所のならいてとう事もいらゆる事も拍子ニ懸て申升ス 拍子に懸てならハいか様
二も答へませうと被仰て被下 太 それハ誠か 参り 誠ちや 太 心得たく イソキシテニ行当リ こりや何とす
サカツ 懸ふと申升ス シ 懸ふとハ 太 きやつか国所ならいてとう事もいらゆる事も拍子ニか、つて申升ス
テ下居 拍子に懸てならハ如何よふ二も答よう申升ス シ それならハ夫といわひてよい肝をつぶした 拍子ハ某か得て居る
きやつか五躰のやうすを拍子ニ懸て尋ふ 是へ出よといへ 太 畏て御さる のふく 其方の五躰のよふすを拍子ニ
懸てお尋被成りやうと仰らる、あれへ出さしませ 参り 心得ました 太 つうと御出やれ 参り ハア 太 今参
り シ 今参りく 参りか着たる烏帽子ハほくらこそ似たり 参り それハさも候中に神をいわふた シテ杭木ヲリ右ノヒサツキ
サシ素袍ノ右ノカタヌキ くわいたりや出かいた 弓矢八幡面白 ほしいこそは高かけれ サエ行 参り はちひたい候
ヨロコフ心持ニテタツ 物シテニ まゆハなせかこふた 両ノ手ヲアテル 参り かきまゆて候物 シ 目こそわくほけれ 参り すつほ目で候物
物シテニ 鼻のきよいとたかいわ 参り こうりやう鼻て候物 シ 口のくわつと広いハ 正面ムキ両手 参り わに口て候物シテ同
断 シ 耳の薄ふ長ひハ 耳ノタ 参り 猿の耳て候物シテ同断 シ むねか高いハ 手当ル 参り 鳩むねて候物 シ

腰こそハほそけれコシニテヲウテ正面エ 参り あり腰て候物 参り すねの細ふ長いハ 参り かふるますねて候物 参り お

とかいかさし出た 参り やアリおとかいて候物 参り やアリおとかいて候物やアリおとかいて候物 参り ナカラシテハ右エトフ

人共コキニテ外トエ廻ル中に壹向イ合戻ル是ヲトメル
マテナンヘンモヤアリヲトカイテ候モノト言也

井杭

シテ 是は此辺りの者ニ住居する井杭ト 御座る申者て御さる ここに誰殿と申て某に御目を被下る、御方か御さる 参る度毎にあたま

をはらせらる、ニ依て何とも迷惑ニ存て清水の觀世音へきせいを懸て御されは何かわ存せず此よふな頭巾の被下た

ト言テ頭巾ヲ取り出ス 定メて是にハよふすか御座らふ 参り 先あれへ参り此頭巾の着て様子を見よふと存る道行誠ニ御目を被下

る、ニ依て参らねわならず参れハ又あたまをはらせらる、ニ依て此よふな迷惑な事ハ御さらぬ 乍去此頭巾の着たれば

定メてきとくのある事て御さらふ イヤ何角と言ふ内にはちや 先案内を乞ふ 物申案内申 参り イヤ表に案内か有る

案内ハ誰ぞ 参り ハア私て御さる 参り エイ井杭そちならハ案内か入ふか なせ二つうと通らぬぞいやい

参り ハア久敷御見舞申ませぬか御替り被成る、事も御さらぬいてお目出度存升 参り 某も随分そくさいて

そちもまめそうて一段ちや 参り 私も随分そくさいて御さり升 参り 扱此中内はなせにこなたそいやい

此間ハ四五日田舎へ参りました夫故御見舞も申ませなんだ 参り 某ハ其様な事とハしらす此井杭ハ何としてこぬ

誰そ中殊かな言ふたかと思ふて此中もくと待かねて居たわいやい 参り 是は如何な事 井杭ハと

れへ居たぞ 井杭く 井杭ハとれへ居たぞ 井杭く 参り 扱く 奇特な事ち

や 此頭巾の着たれハ鼻の先に居る某か見へぬそうな 参り 余り呼る、 出ずハ成るまい 申く 是に居りま

す 参り 表二人か逢ふと申たニ依て居て参りました 参り そちを是ニ置

頭巾ヲ取り右ノ手ニ持
すウシロエカクス

そちハとれへ居たぞ

表二人か逢ふと申たニ依て居て参りました

そちを是ニ置

そちを是ニ置

に依てちや こふ通れ 〱 私は是かよふ御さり升 〱 イヤ〜久敷して来た程にゆる〜逗留して何か咄せい

やい〜 井杭ヲトラエ上座エヤリイリカハリ 其時頭巾ヲ左リノ手ニ持カエカクス 〱 成程久敷ふて御見舞申ました程に五日も十日もとふりふ致て何かお咄し申

ましよふ 〱 此ハ一段とよかろう 〱 扱何そ田舎にめつら敷事ハなかつたか 〱 別ニ珍ら敷事も御座りませなんだ

か私にい名ヲ付ました 〱 夫ハ何とつけた 〱 ある名は申さいてやふれせうしくと申升 〱 定めて夫ハ心か

有ふナア 〱 其事で御さる 御ろうせらる、度毎にはりたからせらる、と申事そふニ御さる 〱 扱〜人の口に

ハ戸かたてられぬ そちを悪ふてはらうか愛さの余り 此言葉ノ内ニ頭巾ヲ持カマエテ其時タ〜コウト スル時頭巾カフルヲ見テイル 〱 是ハ如何な事 又井杭が見

へぬ井杭〜 〱 日付柱ノ方へ行又ヒラキテ主ノ座エ尋来テハシカ〜リノ方ヲ 〱 占やさん占の御用 占やさん占の御用ハ御座

らぬか 〱 しかも上手 〱 占やさん〜 ナンヘンモ言ナリ楽屋よりノ 松エ行時主ヲフナリ 〱 イヤあれ〜一段の者が参つた 呼入て占なわせうと

存る ヤア是〜 〱 私の事て御さるか 〱 如何ニも其方の事ちや ちと尋たい事か有る 先こふ通らしませ

存る 〱 畏て御さる 少シス〜ミ主エ向テ座敷ヲ 見廻し井杭ワキ柱ノ先エ出テ 〱 イヤ算置をよはる、定めて某の事を尋らる、物て有ふ 様子を聞ふと

る 〱 是ハ此なたの御屋敷て御さるか 〱 いかニも身か屋敷ておりやる 〱 先は結講な御家つくりて御さ

る 〱 四しん相応の地と申か此事て御さる 万〜年御子孫まで御繁昌被成る、御家造りて御さる 〱 余の者が言た

らハ其様ニも思ふまいかそなたのおしやれハ満足致た 〱 私共の家業て御さるニ依て一目見まするとそつとも違ふ

事てハ御さりませぬ 井杭ワキ柱ノ 先エ行 〱 いかい下手そふな はやついせうを言ふ 〱 頼たい事か有る 先下ニ居さし

ませ 〱 畏て御さる 主占シテ三人共トニ 居ル井杭主ノ左リニ居ル 〱 扱御尋被成たいハいか様な事て御さる 〱 別の事てもない 失物

ておりやる 〱 失物待人と申てある事て御さる していつの事て御さる 〱 只今の事ちや 〱 それならハ先

手占を置いて見ませう 〱 兎も角しておくりやれ 〱 心得ました 〱 短長間路銀駈馬 是ハ生類て御座るの

〱 井杭ワキ柱ノ先エ 出テ鼻の先エユヒサシ 〱 思ふたよりハいかい上手ちや うたかひもない生類ちや 〱 扱〜其方ハいかい上手ちや

〱 井杭ワキ柱ノ先エ 出テ鼻の先エユヒサシ 〱 イヤ御詞にあまへて申てハ御さらぬか殿方へ参つても有様か来た〜杯と被仰る、事


て御さる 主 とてもの事に居所を指てくれさしませ サン 夫ならハ先一算置ませう 主 いかよふ共頼むそ サ

扨門前ハ節々通り升れ共御用なけれハついで御見廻も申ませぬ 此後ハ度々御用を被仰付て御目懸られて被下

上言内ニ袋より算木八卦 出ス袋ノ口取ノコトククミル 主 如何ニも心易ふお出やれ ウチニ 八卦アケル サン 扨此方の御年ハおいくつて御座る 主 何才て

おりやるいかにも御年て サン すれハ何の御年て御さるか 主 いかにも其通りちや リコトケンケンケンケン 離坤兌乾坎艮震巽 ハ ア此

卦に当らせられて千年 手 観音の御マモリ御本尊て御座る 御信心を被成ませ 右ノ内ニサンキ 下ニアリ八卦ヒ

ラキテソコヲ言ふナリ扇ノカナメニテ八卦ヲサシヨムナリ 八卦ノ内ニ丸キ物アリ此内ヲ見て言心ナリ  此ことく 左リヨム 主 是迄ハ左様の事も知らなんだ此後ハ信心するておりやら

ふ サン 御信心被成たかよふこさる 先一算置て見ませう サンキノコラス 左リノ手ニ持ツ 主 置ておくりやれ サン 扨当年ハ何年

何月或日漸何の剋ても御座らうか 主 そうても有ふか サン 一遊魂 ニセツメイ 二絶命 カ 三禍害 チ 四天医 フクトク 五福德 ユネン 六遊年

七生家 セツケ 八絶躰 セツタイ 大水出れハ堤のよわり大風吹けは古家にたゝる 左手ニ残ル算木ヲ下ニヲキ 右手ニ扇取モチカンカエル算ノヲキヨウ 主 ハ、ア是は此御

座敷を放れた物てハ御さらぬ 主 如何ニも座敷ニ居て見へぬ物ておりない サン それハ何て御さる 主 人ており

やる サン ヤア人て御さるか 主 中く サン いつれ此の鏡の面を見る様なくもりのない御座敷二人の居て見へ

ぬ筈ハ御さらぬか 乍去算の面ニハ此方の左りの座に居ると御さる 尋被成て御らうせられませ 主 お見やる通り

何も居ね共算の表ニとあらハ尋て見よふ サン よふ御さりませう 主 井杭くく サン おりませぬか 主 何

も居ぬそや 立テワキ座エタスネ行又モトノ座エモトリ 下ニ 居ルシテヒサリラシテ跡ヘニケル主両手ニテ尋ル 井杭シテ柱ノ 先エ行 主 是りや所を替へすハなるませ 算置ノ右ノ座ニ 八卦ヲ見ツメテイル サ

扨く 主 ふ思儀な事て御さる 惣して失物待人と申て算置の六ツケ敷い者て御さる 主 そふて有ふな事ちや サ

左様ならハ最一算おいて見ませう 主 兎も角もしておくりやれ サン 心得ました 一徳六かいの水 二儀七よ

ふの火 三生八難 四絶苦疫 五鬼道の土 セツクヤク 犬土 はしれハ猿木へ登る 主 尤な事ておりやる サン ねつみけた

はしれは猫急度見たり 井杭ノ前へ算木ヲラク井杭 ハナヲツキモヲツフステ 置カンカエテ サン ハ、ア此度ハ座を替へて私の右の座に居て算の面を

急度見つめて居ると御さる 尋させられ 主 お見やる通り何も居ね共算の面てとあらハ尋て見よう 井杭く

タスネヨウ前ノ如ク目付柱ノ市エタツネ左エヒ ラキ座エ来ル井杭前ノ如クニケシテ柱ノ先行 算置ノ後ロヲサシシテ兩人ノ中 居ル 子供ナレハ只ナラ シ 扨く 主 いかい上手ちや 又座を替すハ成るまい

大人ナレハア
クラカクモヨシ

主 何も居ぬそや サ 扱く合点の行かぬ事て御さる 今日ハ何とやらちらく致て算か合にくう御

さる 乍去爰に金こく木とこく致てハ御され共金生水とかたらふた処も御さる 追付置出すて御さらう 主 夫ハ頼母

敷ふおりやる サ ンキヲカラリト ナクルヲ見テ 主 それハめつらしい算ておりやるのふ サ 二なたハよい処へ御氣か付ました 是

ハ天狗のなけ算と申て私の家ならてハない算て御さる 是を取もなおさす考出す事て御さる 主 尤な事ておりやる

サ 鳥渡御され 主 何かちや 算置ト主ハ一ノ松へ行ク 井杭向人の中にハイリ行ク サ 此者は仏力神力に叶ふた物て中く其方や某の目二見ゆ

る者てハ御座らぬ 今度ハ座を替へて其方と私のあい居ると御座る たまいてとらよふ ぬからせらるゝな 主 心得た 此時井杭ウナツキ 三人共元ノ座江モトル シカく言テ兩人ウナツキ合テ 兩人 井杭くく 井杭くく 余り算かよ

ふ逢二依て算木を取りかくし八卦を取りみたいた 是てハよもや算の逢ふと言ふ事は御さるまい 兩人 井杭くく

サ ヤアラそなたハ聞へぬ人ちや 主 何とした サ 何と、言事か御さらふか 其方ハ御ひまのまゝに算置を呼

ふてなふらせらるゝの 主 なふるとハ ツク サ 是見させられい たつた今迄置つめて置た算木を取りかくし八

卦をとり乱し是て何と八卦か逢ふ物て御さる 残り八卦ヲ 袋二入レ 主 イヤ爰な者か 算か合ぬに依て面目なさに其

様な事を言ふ 某わ手もやらぬわい やい 主 前内ニ算木二本 主 前へホリ出ス 主 それくこへ出ておりやる サ 出たと言ふ事か御

さらふか 早う出させられい 主 前内ニ算置ノ前エ 算木一本ヲトス 主 そこへも出たわ サ 誠二是へも出ました 主 それお見やれ

そちかかくして置た物て有ふ サ かくすと言ふ事ハ御さらぬか さあくみな出させられい 主 前内ニ算木ヲ 皆ホリ出ス 主 それ

皆出たハ サ 皆出たと言ふ事かある物か 御ひまのまゝに算置をなふらせらるゝの 主 なふると言ふ事か有ふか

ト前内ノ 橋工行 主 ちとけんかをさしよう 主 前内ニ算置ノ鼻ヲ 主 前内ニ算置ノ鼻ヲ 主 前内ニ算置ノ鼻ヲ 主 前内ニ算置ノ鼻ヲ

人か 某わ算木をしもうて居り升わいの 算置ノ鼻 ハチク 主 あいたくこりや身共の鼻をはしかせられたの 主 某ハ知

らぬわい やい 主 引 主 あいたくこりや身共の耳を引たな 主 身共ハそなたのかたへみむきも致さぬ 算置ノ 耳引

主 あいたくこりや某の耳を引せられたの 主 くとい事を言ふ しらぬわい やい 主 ノカタ持チてコカシ 又算置ヲコカシ届テタメク 主 二人 あ

いたくくく 主 最早堪忍ならぬ サ 御人躰二ハ似合ぬ事を召さる 主 算置ちやと思ふて居ればほふり

ヤア 見させられい鳴子をかけて置ました 夫レ御存無に依て、御座る あれハ遣子て御さる

扱く分も無る事言わせらるる 遣る子と言事か有物か 笑 何を笑せらるる 某ハ大事無イか他所江出

て恥をか、せらりやう 人聞悪い何の恥をかこう あれハ鳴子てハ御座らぬ遣子て御さる 此方ハ片意智

に被仰る、何と夫ならばかけ六に致そふか いかにも掛六に致そふ 何を懸ませう 夫こそ銘の一腰を

懸ませう 乍去此理非を分けてか御さらぬ 幸此当りに毎も出る茶屋か御さる きやつか物毎よふ存て居る

是に聞て貰いませう よふ御座るふとれへなり共参るふ 此方ハ物を片意智な事を被仰る、あれハ鳴子て御

さる イヤく此方が片意智て御座る あれハ遣子て御さる 此方ハ物を片意智な事を被仰る、あれハ鳴子て御

さる イヤく此方が片意智て御座る あれハ遣子て御さる 此方ハ物を片意智な事を被仰る、あれハ鳴子て御

さる イヤく此方が片意智て御座る あれハ遣子て御さる 此方ハ物を片意智な事を被仰る、あれハ鳴子て御

さる イヤく此方が片意智て御座る あれハ遣子て御さる 此方ハ物を片意智な事を被仰る、あれハ鳴子て御

さる イヤく此方が片意智て御座る あれハ遣子て御さる 此方ハ物を片意智な事を被仰る、あれハ鳴子て御

さる イヤく此方が片意智て御座る あれハ遣子て御さる 此方ハ物を片意智な事を被仰る、あれハ鳴子て御

さる イヤく此方が片意智て御座る あれハ遣子て御さる 此方ハ物を片意智な事を被仰る、あれハ鳴子て御

さる イヤく此方が片意智て御座る あれハ遣子て御さる 此方ハ物を片意智な事を被仰る、あれハ鳴子て御

さる イヤく此方が片意智て御座る あれハ遣子て御さる 此方ハ物を片意智な事を被仰る、あれハ鳴子て御

さる イヤく此方が片意智て御座る あれハ遣子て御さる 此方ハ物を片意智な事を被仰る、あれハ鳴子て御

さる イヤく此方が片意智て御座る あれハ遣子て御さる 此方ハ物を片意智な事を被仰る、あれハ鳴子て御

さる イヤく此方が片意智て御座る あれハ遣子て御さる 此方ハ物を片意智な事を被仰る、あれハ鳴子て御

さる イヤく此方が片意智て御座る あれハ遣子て御さる 此方ハ物を片意智な事を被仰る、あれハ鳴子て御

ヤ何角言内に御前ちや 誠主に御前て御さる 汝も夫て御拜メ 畏太て御さる シヤカン主く只今参る別の事ても御座らぬ 某未夕定る妻か御さらぬ 何卒似合敷妻を御さすけ被成て被下 南無観世音主く今宵ハ是につやをする程に汝もそれてまとりめ 心得太ました ハア主くハア引 あらありかたや南無観世音主くヤイク太太郎官者 ハア主 扱主く新なる御例夢を蒙た 夫ハ如何様な事て御さり升 汝か妻ハ西門の一の木座橋に立せて置との御例夢ちや 夫ハ御目出度事て御座る 伊サ西門江行ふ サア太く来る 畏て御座る 御例夢の御妻ちや程に嘸みめよして有ふナア 左様て御座りませう せいげんあらたなと言か定うちや 早速妻をさすけて被下て此様な悦しる事ハ無る イヤ何角言内に西門ちや 誠主に西門て御座る 事に御さる 氣を付て見よ 心得太升た イヤあれに御出被成升 誠主にあれに居らる、去なから人たかへと言事もある 汝尋て来い 私の妻ならハ尋ませうか此方の御妻て御座る程に此方居て御尋被成ませ イヤ身共ハちと恥敷い 是非共行ケ 是ハ迷惑な事て御座る イヤ申く 夫に御さるハ頼ふた御方の御れい夢の御妻て御座るか女ウナツク 笑主 うたかいもない御妻ちや 迎を進ませうか処ハとこちやといふて尋て来イ 心得太升た 迎を上げませうか所ハ何処て御座る 恋フシ女しくハとふても来まし伊勢の国伊セ寺元に住そわらハ、ア、申く 留主ませいく 是ハ如何な事こりやとつと行れた 左様て御座り升 何とやら言われたか 恋主しくハとふても来まし伊とハ覚へ升たか跡をわすれ升た 扱主く氣の毒ちや何とした物て有ふナア 私存升るハ是に関をすへまして往來之人に跡を付さしませうと存ママます 是ハ一段と能かるふか此天下治た御代主に関ハ何と有ふ 是ハ此方と私との内證之関て御座るに依て苦敷うない事て御さる 先是へ御腰をかけさせられて是を持て御出被成ませ 心得主た 随分ぬかるな 畏太て御座る のふく急かしやく 急用有て山壹ツあなたへ御使に参る 先急て参ふ 扱主く奉公人程苦勞な者ハ御座らぬ いつ何時ともものふ御使に参る事ちや ア、関ちやく 何ちや関しや 中主く 先ハ合点の行ぬ 此天下納ツた御代に有る関さへ御赦免被成るにしん関とハ何事しや イヤ氣遣ひさしますな 替りを取らぬ関しや 夫ならば先安堵した 是ハ先

何の為の関しや ^太 不審尤しや あれに御座るは頼ふた御方しや 未夕定る御妻かないに依て清水の観世音へ申妻を
 被成たれは早速御妻をさつて被下た 迎を進ませうか所て何処で御さると尋たれハ恋しくハ問ふても来ませいと仰
 られて此跡を忘れた 此跡を付させうか為の歌関ちや ^シ して夫ハ誰か聞た ^太 某か聞た ^シ 聞たお主さへ知ら
 ぬ物か某か知らふよふか無ゐ 其上某ハ急用しや とふ有てもこふ行そ ^太 通す事ハならぬ ^シ 越へて行ふ ^太
 こへさしハせぬ ^シ く、つて行ふ ^太 イ、ヤならぬ ^シ 跡へ戻ふ ^太 跡へもならぬ ^シ 是非に及ぬ下二居
 よふ ^太 下にも置ぬ ^シ 扱く ^シ 氣ノ毒な事をおしやる 此様な難義な事ハないト言てつくり共して居られまい
 付て見よふか何とやられて有たのふ ^太 恋しくハとふても来ませいと迄ハ覚たか跡を忘れた ^シ 是ハ定めて国の名て
 有ふ 伊の字の付た国の名を言ふて見よふ程に夫ならば夫と答さしませ ^太 心得た ^シ 思ひも寄らぬ関守になこ
 うとするこそおかしき ^太 おかしき ^シ 伊の字ノ付た国の名く ^シ いの字ノ付た国ならば伊よの国の事かの
^太 夫にても候らわす おもいもよらな国の名 ^シ 伊の字の付た国の名く ^シ 伊の字の付た国ならば伊賀の国の事か
 の ^太 夫にても候らわす 思ひも寄らぬ国の名 ^シ 思ひも寄らぬ国の名いの字の付た国の名く ^シ 伊の字の付た国
 ならハ伊せの国の事でかな有ふ ^太 ヲ、其伊勢の国の事て有た 先吟して見さしませ ^太 心得た ^シ 恋しくハ
 とふても来ませ伊せの国い ^太 又いてつまつた ^シ 其様にいてつまるならばとうしん引の娘て哉有ふ ^太 むさと
 した事を言わす共此跡を付さしませ ^シ 今のハふと言合せた 此跡ハ又跡から来る者に付て貰しませ ^太 是迄付て
 置て其様な事か有物か 是非とも付てくれさしませ ^シ 夫ならばとてもものに言ふて見よふ 国の跡にハ里か付物し
 や 伊の字の付た里の名を言ふ程に夫ならハそれと答さしませ ^太 心得た ^シ 伊ノ字の付た里の名く ^シ いの字の
 付た里ならハ伊出の里の事かの ^太 夫にても候はず ^シ 夫にてもそふすハしんへんや氣毒やきたいなりやふしきや
 伊ノ字の付た里の名く ^シ 伊ノ字の付た里ならハ伊せ寺元の事かの ^太 ヲ、其伊せ寺元の事て有た ^シ 夫
 ならハ又吟して見さしませ ^シ 恋しくハとふても来ませ伊せの国伊せ寺元に住そわらハ、 ^シ 是までなりや関守
 さらは暇申さん ^太 アラ名残おしや ^シ 此方も名残おしけれと ^シ あの日を御ろふせ ^シ 山の端に懸た ^シ

銘くさらりと梅ハほろりとおつる共まりハ枝にとまつたくくとまりくとまつたとつくと シテ イヤ

ア

アト 主 長上下 シテ 使者 狂言楊ク、ル笠持ツ

アト 太郎官者 如常 アト 妻 はくかつき

入用 かつら桶 つな

スケ笠

辛魚

次第 アト 我わ仏と思へ共く人ハ何とか思ふらん 言葉 是ハ日向の国の者ニ而候 我いまた都を見ず候程に此度思い立

都へ登り候 道行 筑紫人空事すると聞つるに シテ 我わ誠の修行して清水の浦につきにけり 急候程に播磨の国清水の浦

に着て候 是なる卒都婆のかけに立寄休はやと存候 シテ のふくあれなる修行者に申へき事の候 ア 此方の事に

て候か 何事にて候ぞ ア 是ハ去年の春の比此清水の浦にて身まかりたる鮭のゆうれいニ而候也 跡弔ひてたひ給へ

ア 不思議の事を聞物かな 何とて魚類の身を転しなとか仏果に至らさらん ア げに ア 仰は去ル事なれ共獵師に

恨をなすゆへかうかみもやられてかなしさよ かまへて ア 御弔ひあれと同音かきけす様に失にけり ア 扱もく

只今者ハ鮭の幽霊なると申て候 是成卒都婆に付ていわれの無き事ハ候まし 所の人に尋ばやと存候 所の人の渡り候

か ア 所の者と御尋ハいか様なる御事に而候ぞ ア 是成卒都婆はいかなる人の建置れて候ぞ ア さん候 去年の

春此清水の浦にて大鮭をあみにて引揚候程に一段の大鮭にて候 所の者共寄合思ひ ア に料理致したへ候所に一段の

風味に而候 此鮭の執心深きゆへにや所の者にたゝりをなし申て候 処の者共おそろしく思ひ又ハふひんに存其たへ残

りたるを此処に突こめ印に卒都婆を立置弔ひ申て候 今二も尊き人の御通りあれハ姿をま見へ申杯とハ申せともたる事ハなく候我等如
 きの見申たる事ハ無く候 御僧も逆縁なから弔ふて御通り候へ 懇アに御物語り祝着申て候 さあふハ逆縁なから弔
 ふて通ふするにて候 重問而御用も有ハ仰られ 頼アましよ 心得問ました 夫れ仏こわ様く多けれとも取り
 分亡者の悦んと中にも妙へ成るしん経キヤウの又鮎とくあのくたら三百三文二買ふて仏に奉りア、ラなまたく あら
 たへがたのしよふ名やナ猶くとむらい給ふへし 不審義ヤナ人家も見ゆる昼中に化したる姿の見へつるハいかな
 る者そ何者そ 是ハきのふの暮程に詞をかわし参らせたる鮎の幽霊成り 御弔ひの難有さに是迄あらわれ参りたり
 扱アはきのふの暮程に詞をかわしたる鮎のせいアか最期の有様さんけせよ 跡をハとふて得さすへし 思ベひ出るも
 うとましや 獵師の網に引揚られしふ皮もむけよくとあらわれてけつり立たるまな板の上に 引同音すへられてう
 しろよりく庖丁を押当らるれハ目くらみ息つまつてうつつふしに押伏せられてづをはいてそ伏たりける しこふ
 しておき上れハ同音あるひハ四方へく張鮎のてる日にさらされ足手をけつられ塩にさゝれて隙もなき苦しみなる
 を妙へなる御法の庭に出て仏果にいたる有かたさよ 只ひとこゑを南無阿弥そ 只壹声をなま鮎とかき消す様に失にけ
 り

シテ 角頭巾 ノホリ髭 着流し 後チ黒頭ウソフキ

水衣 着流し 竹杖ツク

アト 僧 水衣下ク、リ コヲシ頭巾

珠数モツ

アト 間 長上下

連歌盗人

シテ 是ハ此辺りの者て御さる 某初心講を結んで連歌を致ス 此度当に当てハ御座れ共手前ならぬに依而此堂のいと
なみ様かない 又爰に誰殿と申て相当うか御さる 是へ参り相談致ふと存ル 誠に手前ならぬに連歌を致ス杯と申ハ人
が聞せられても宜敷うない事なれ共すきの道なれハ興行致ス事ちや イヤ何角言内には是ちや 先案内を乞ふ 物申案内
申 ^{アト} 表に案内カ有 案内とハ誰ぞ ^シ 某て御さる ^ア エイよふこそ御出被成たれ 是ハ何と思召ての御出で
御さる ^シ 只今参る別の事ても御さらぬ 内々の当も近日になり升た ^ア 言わせらるる通り近くに成て御さる
^テ 定而此方には何か御拵へ被成たて御座ろふ ^ア 何も拵へと申程の事も御座らぬか入物しやと存て檜葉杉葉杯を沢
山に用意致升た ^シ 是ハ重宝な物て御さる 扱何を御用意被成た ^ア 先夫迄て御さる ^シ 扱くわけもない事
を言わせらるる 此当うか其様な事てハ勤まり升まい ^ア 扱此方ニハ何を御用意被成た ^シ 某も用意致すと申程の
事も御座らぬか是もいらいて叶ぬ物しやと存て杉楊枝百本斗りけづり升た ^ア いかさま是も重宝な物て御座る 扱何
を用意被成た ^シ 先夫迄て御座る ^ア 此方も思召ても御ろふせられ 此としか檜葉杉葉杉楊枝なとて勤る堂てハ御
さらぬそや ^シ 夫に付て御相談に参た 奥に誰も誰もなくハ通りませうか ^ア 幸誰も御座らぬ通らせられ ^シ 心
得升た 扱此事を申出し升て御承引有ればよふ御座るか若シさもない時ハ某か迷惑致ス事て御座るに依て申兼る事て御
さる ^ア 何か扱当の勤る事てさへ御されハ何なりとも同心致ふ 被仰れ ^シ 別の事ても御さらぬ ^ア アノ誰殿ハ手
前しやて御さるのふ ^ア 言わせらるる通りう徳な人て御さる ^シ 夫に付て今夜月夜影にコヲ兩人忍ひ入テ何なり共
道具を一ト色二色案内なしに借て参て夫を物と致て当を勤ふとおもい升か ^ア のふく皆まで言せられな 此とう
かそふのふてハ勤まり升まい ^シ すれハ御同心て御さるか ^ア 左様て御さる ^シ ヤレく何と有ふと存て心元
のふ存たに早速御同心なされて一段に存る ^ア 此様な事ハよいか付たかよいと申 イサ参るまいか ^シ 善ハ急け
で御座る 能御座らふ ^ア そなたから行せられイ ^シ 何か扱案内の為に其方から御され ^ア 案内とハ迷悪て御座

る 某から参ろふか 能御座ろふ さあく御出被成 心得升た 何と思わせらるる いかに手前ならぬと申てあらぬたくみを致ス事て御さる はて天神のかこて仕合を致たらハ元く江戻しませうハ扱 其通りて御さる イヤ何角言内には是て御さる 誠には是て御さる 此中普請せられたと聞升たか中くひ、敷い鉢て御さる 是ハ表からハ這入られ升まい 裏へ廻りませう よふ御座らふ 又裏ハ其様ニも御座るまい 其通りて御座る されハ社 表に似ぬ裏て御さる 普請中ハと見へて垣一ト重て御座る 是さへ越せはさつと濟事て御座る 左様て御座る 此様な事も有ふかと存て鋸を用意致し升た 扱く此方ハ何から何までか御功者な事て御さる 是ハ又迷惑な事を言わせらるる 先垣を破りませう 能御座らふ スカくくスツカリ 兩人メリくく 誰 誰 何と鳴たてハないか 夥敷う鳴た 仕付ぬ事とて今の音を人か聞ふかと思ふて某の耳にちよつと手をあてた 身共も其通りて御さる 乍去誰も聞なしたそふな 垣を越う 一段とよふ御座らふ 兩人エイくく のふく嬉しやまくまんと垣を越しました 其通りて御さる 早や爰か戸て御さる 誠に戸て御さる サラくく とほし火か見ゆる 南無三宝 又また寐ぬかの 起て居るならハ声を立そふな物ちやか 何とした事ちや エイ合点しました 何とて御さる 誰殿ハ用心深ひ人しやに仍而有明のとほし火を置たと見へ升た うたかいもない そふて御さらふ 氣遣ひ無い 這入せられる 心得ました のふく嬉しやくうまんまと忍ひ入升た 其通りて御さる ハ、ア是ハ宵に客か有たと見へて道具か取ちらして御さる いかさま左様て御さる 風炉 釜 茶入 茶碗 水指 是ハ何を一色取て参ても当ハ勤ると申物て御さる 宝の山へ行たと言ふか此事て御さる 硯 文台 ハア、是に廻紙か有る 誠にかい紙か御さる 水に見てアト吟スル月の上なる木の葉哉 ア、扱もく是ハ面白事て御座る 此方ハ是を知らせられぬか イ、ヤ何をも存ませぬ 是ハ此家のあるしの家固の時の出来発句て御座る 扱く其様な事て御座るか 某ハ存せなした 何と思はせらるるぞ こふ兩人忍入も連歌を好ム故の事て御座る

是を見捨にするハほいしない事て御座る程に兩人添発句を致すまいか
是ハ一段とよふ御座らふ 此方発句を被成
先こなた被成 左様ならハ出勝に致ふ よふ御座らふ
こふも御座らふか 木末ちりアト吟スルあらわれやせん下紅葉
ア、扱もく面白事て御さる 定而悪ひ処も御座る程に直して被下
イカナく此句に直スなるといふハない事て御さる イヤく稽古之為ても御座る程に平に言ふて被下
ハア稽古の為と言わせらるる程に言ふて見ませうか 何とて御さる
ア 句ハ片の如く出来て御さる 此句にハちと指合か御座る
発句に差合ハ無いかと存升か イヤ其差合てハ御座らぬ
コヲ兩人忍ひ入ましたに此あらわれやせんと申か差合かと思ひ升る
イヤあらわれやせぬて御座る 夫ならハよふ御さる 脇ヲ致ふ
よふ御座らふ こふも言われませうか 何とて御座る
ア 時雨の音をシテ吟スルぬすむ松風ハ、扱もく是ハ聞ニマとて御座る
イヤく定而悪ひ所か御さるふ 互に稽古の為しや言ふて被下
ハアそふ言せらる、なれば此盗といふかちと耳にさわる様に御さるか
イヤくまた楊枝壹本盗ハ致さぬに仍而苦敷御座るまい
夫ならは吟して見ませう 能ふ御さらふ
発句より兩人吟スル ヤアく何と言そ 座敷に人音かする
内の者か 何盗人ちや 裏江も表へも人を廻せ 爰ハ身共かふせくそヤイくく
ソリヤア 南無三宝
ひきれい 悪ひやつ兩人の ア、御ゆるされませく 己等胴切にしてくりやふ
ア、聊尔な者てハ御座らぬ 苦敷無者とハ 御座敷を拝見に参た者て御座る
夜中に座敷を拝見とハ ア、是ハあの者の申そこないて御さる
とふにまよふて参た者て御さる 何卒御介ケ被成て被下
夫ハ共あれ汝等ハ何やら吟する様に有たか何しや
御耳江入升様な事てハ御座りませぬ イヤ中く面白そふな事て有た 是非共おしやれ
サアく候有ハ其方おしやれ 是はて扱御主おしやれ 誰それと言はす共早う言へ
ハア御床を見ましたれハ御会紙二水に見えて月の上なる木の葉哉と御座つたに依而兩人致して添発句を致しました
夫ハ何としか
こすへちり主吟スルあらわれやせん下紅葉と致て御されハ是に居り升る小盗人か脇を致しました
夫は何しや
サアく言わしませ 其方直に言ふてくれさしませ おぬし出ておしやれいの
急て言へ

ア ハア時雨の音を盜松風と致して御され共又夕楊枝壹本盜ハ致升せぬ 何卒御ゆるし被成て被下 扱くやさ
 しい盗人ちや そふあらハ某か第三をせう程に四句めを付たらハ命を助けてとらせう 是ハ定而出来為せらるゝて
 御座りませう ア 夫ハ忝ふ存升る 是ハこふもあらふか 早出ましたか 何とて御座る 闇の頃シテ吟
 スル月を哀と忍ひ来て したりくコリヤ天神も及せられ升まい 急て四句目を付い ラヌシ付イト言テ
アト押出ス ア サ
 アく付さしませ 其方御付きやれるの 是ハはてお主御付きやれイノ 誰かれと言わす共早う付い ハ
 ア左様ならはこふも御さりませうか 何とちや さむへき夢そと吟するゆるせ鐘の音 ムウ一段と出来た
 サアく命を助る程に帰れ 夫ハ忝ふ存升る 去ながら左様に被成て御座つてハ迷惑て御さる ちと御開き被成
 て被下 是ハ尤しや 太刀もさやへ納る さあく帰れ イサ御行きやれ 先御行きやれ エイ誰
 ハア 誰 ハア 是ハ先何とした事しや 面目も御座りませぬ 面目無い処てハない 先ハ
 互にけかゝのふて悦い 定而是にハ様子か有ふ 何とした事しや されハ其事て御座りまする 私共初心講を結ん
 て連歌を致まする 近日当にあたつて御座れとも手前ならねは此とうのいとなみ様か御さらぬ 夫ゆへ御道具を一卜色
 二夕色借りて参り夫を持って当を勤ふと存此様な面目ない事ハ御さりませぬ 私ハまいるまいと存れともあの者か
 非共と申たゆへ参た事て御さる 是く今と成て其様な事を言ふ物ておりやるか テモ其方ハ鋸まで用意お
 しやつたてハないか 扱く迷惑な事をおしやる コレくたかに論ハ無用ちや 夜寒にも有程に酒壹ツ
 のふて御行きやれ 忝ふ存升るかもふ直に御暇申ませう もふこふ参りませう そふ言わす共先ゆるりと居さ
 しませ 左様ならハ畏て御さる 心得升た ト下二居ル
心元無い心持ニテ 迷惑な事てハないか 其通りちや
 サアく壹ツ吞しませ 是は御自身に御持被成升た 夜中の事なれハ自身持ておりやる サアく御吞
 みやれ 是ハ慮外て御座り升る 丁度御吞ミやれ 御さり升く サアく其方も吞しませ
 近比慮外て御座り升る 丁度御吞ミやれ 御座り升る 扱く是ハ結構な御酒て御座り升る 氣に
 入たらは最一ツ御吞ミやれ 左様ならはも一ツ被下ませうか 一段と能かふ 又丁度御吞ミやれ 御座り

升く 誠に結構な御酒で御座り升る 其方も氣に入たらはお呑みやれ 夫ハありかとふ存升る 丁度
 御呑みやれ 御座り升る 主 サア 逆の事に三はいッ、御呑みやれ 左様ならば被下ませ 主
 丁度 御座り升る 太 サア 御呑みやれ 是ハ度々慮外で御座り升る 主 丁度 呑しませ 主 御座
 り升る 扱く 忝ふ存升 御酒をたべましたら胸か落付ました 主 是ハ一段しや 左様ならばもふこ
 ふ参り升る 御暇申まする 主 是く 二人 ハア 扱其方に何かなと思へ共夜中の事なれハ何も有合せぬ
 此太刀は持古ひてハ有れ共其方におますそ 先以て忝ふ存升る 去ながら御ゆるされて被下さへあるに是ハ御しん
 しやく申升ふ 主 イヤ苦敷うない事ちや 取ておかしませ 是非共御しんしやく申ませう ヤア是くアノ
 様に仰らるゝをたつてと申せは慮外しや 頂て置しませ 左様ならハいたゝいて置ませう 主 よふ御りやろふ
 扱御主ニも何哉と思へ共今言通りしや 此刀ハ差古ひてハ有れともおますそ 是ハ思ひも寄ぬ事て御座り升 アノ
 御太刀一振御座れハ此当ハ勤り升 是は御断申ませう コレく人の事をたに言ふ此方ちや 頂て置しませ
 左様ならハいたゝいて置ませう 一段と能かるふ 扱おしりやるとほり某も連歌をすけとも能供かない 此後
 ハ兩人共節々出さしませ なる程畏て御さる 度々参るて御座りませう 私も御見舞申ませう 主 去な
 から今宵の様に裏からハ無用ておりやるそや ハア裏から参ると申ても私共兩人ならてハ御座りますまい イ
 ヤく必裏からハ無用ちや 是におろふすれ共けつく六ヶ敷かるふ 奥へ行ほとにゆるりと休息してお行きやれ
 夫ハ忝ふ存升 主 もふこふ行そ 二人 ハア 何と思ひも寄らぬ事てハ無イか 夢のさめた様な事しや
 是と言ふも天神のかこしや イサわかを上ケて帰るまいか 一段と能ろふ 急て上ケさしませ 主 実に和歌
 の其道鬼神迄ものふしゆとハかゝる事をや申らん 二人 実にやつねよの習ひにや盗人を取らへてハ切こそ法と聞物を
 此盗人ハさわなくて連歌助けるやさしさに呼れてけんそうし酒壹ツ吞せて 太刀 刀 二人 たびにけり 是
 かや事のたとへにも盗人にをいと言事ハかゝる事をや申らん 主 のふく 其方と某ハ五百八十年 七廻り
 何事も有まい ちやつと来い 心得たく

此狂言心持子第一の事也よく積古致動候か
 カンヨラ也アハセカタ衣ニテモヨシ

童ハ此家の者て御さる 是の人ハ大酒を呑に酔狂の余りわらわをちよふちよくせらるる けふも又とれへやら参ら
れた 定而酒を呑ふて居らる、物て有ふ 今にも帰られたれハ酒を留らせらる、様に異見のしやふと思ひ升る シテアノ山ヲ
誦出ス也

笑 女ともくく 是のか帰らせられたそふな 戻たそく 帰らせられたか 帰らせられ
たかお主ハ今迄何をして居た 何をして居ませう内に居ました イヤく合点か行ぬ 惣して身共か表から

這入は裏から出る 又裏から戻れば表から出る 何共合点か行ぬ事ちや 又さらに酔て分も無い事を言わせらる、
誰か酒に酔た たれて御さらふ此方か イヤく身共ハ酒にゑいハせぬ 夫程呑ふ居て酔ぬと言ふ事

か御座ろうふか たとへ身共か呑ふと呑まいとかもふてのよふハ かまふて、ハ御座らね共其様に吞せられて
ハ身も世もあられませぬ 此後は留らせられイ 又してもく異見聞とふない 隙を遣た出てゆけ 又し

てもく童に行と言わせらる、童か居つは能いなりて御座ろふ 己は口広い事を言ふ 己か居ぬとて女に事を
かこふか 早ふ出てうせ 左右有ハ行もしませうか何ぞしるしを被下 何の印か入らふ 隙を遣るか印しや

イヤくちりを結んでなりとも印と言事か御座る 何成共くれさしませ 何ちりを結んで成ともくれイ
中く 夫ハ心安い事ちや トニコロヒナクニチリトツテ
左手ニテ女ニヤル エイ腹立やく 夫ハたとへてこそ御座れ何なり共

覚の有物をくれさしませ 扱く六ヶ敷事を言 隙遣るに何かおしかるふ 何を遣ふぞ 是を遣ふ ツホヲリノ小袖ヲ
ヌイテ女ニヤル ハア、是を被下るか これも遣るぞ すれば誠て御座るか おんてもない事 笑 扱く

情無い事ちや ナク こりやほゆるか ほへた迎身共か何んと思ふ事ちや そちハまた行ぬか 今行まするわ
ゐの 行おらぬか 進出ス 行升るく またそこに居るを とつと、出てうせ 笑 参升る いに升る

女太鼓座へ 行下二居ル ヤレく嬉しや きやつに隙を遣つたれハ心かはれてせいくとする 又とれへそ往て酒を呑ふ
サ、ンサア 扱もく情ない事ちや 是非に及ぬ親里へ帰ふと思ひ升る 誠にあの男に名残おしふハ御さらね共ひ
入ル申入

とり有る金法師かかわゆう御さる イヤ是ちや のふくと、様 御内に御さり升るか 男初メ女二付テ 出ル 表におな

わの声かする よふこそおりやつたれ ハア機嫌が悪いか扱ハ又いさこうて来たナ 女 ちこの人か毎のやうに酒に酔

て童に隙をくれられたに依て戻ました 男 それハ氣ノ毒ちやか今に初めぬ事ちや 戻ると言ふ事か有物か 女 イ

ヤ／＼毎の様な事てハ御さらぬ 此度ハ是非隙をやると言ふてくれられました 男 たとへ左右有ふ共ひとりある金

法師ハふびんにハ思わぬか 如何様な事か有ふとも女ハ七度迄ハ暇を取らぬ物ちやと言ふ そつじに出て来ると言ふ事

か有物か 女 アノ被仰る事は童にいねと申ハ五度や十度の事てハ御さらぬ 男 またおしやる たとへ五度や十度の

事て有ふ共酒の上の事しや 機嫌を直していなしませ 女 扱は童を是に置まいと思ふて其様に被仰か 男 そふて

ハない 身共も酒ハ壹ツ吞か酔ふてハ何事も覚ぬ物ちや 悪い事ハ言わぬ兎角いなしませ 女 夫ならば童も覚語しま

した 女ノ身に太刀刀の立ぬと言ふ事も御座るまい 太刀刀か立すハ淵川へ身をなけて成共死にませう ナク 男 扱

ハ夫程までに思ひつめさしましたか 女 思ひつめて何と成ませう 男 こふ言ふもそちかかわゆさの事ちや 是非

に及ぬ いなしわせぬ程に心安う思わしませ 女 それ程に思ふて被下るれハ嬉しう御さる たとへ此方の御氣に違ふ

と有ても戻る事てハ御さらぬ 男 夫ならばよい 又当りの者かあつかいに見ゆるて有ふ 是に置いてハ戻さねはおとな

け無い お主ハ是へ来ぬといわふ程に奥へ通らしませ 女 心得ました 女箱座ノ上に居ル 女より前ニ居ル 心テ後橋か、り 扱も／＼大

酒にたへ酔正躰ものふ寐て居た 目か覚て女共を尋れハ夜前酔狂の余りに隙を遣たと申 女共か居らてハ片時も致よふ

か御さらぬ 定而親里へ居た物て有ふ 辺りの衆を頼んで迎に遣りたけれ共余り度／＼の事て面目もない 此度ハ某

か参り舅に貰ふて参ろふと存ル 扱も／＼あまり度／＼のて気毒ちや 乍去向後ハ酒を止ると申たらハ定て戻さるて

御座ろふ イヤ爰ちや 物申案内申 御内に御座り升か 男 案内とハ誰ぞ 女 私て御さり升る 男 エイ誰 よふ

おりやつたのふ 男 此間ハ御見舞申ませぬかおかわりのふて悦敷う存升る 男 其方も無事て一段ておりやる 女

難有ふ存升る 扱私も酒をふつ、と留り升て御さる 男 夫ハ何とした事ぞ 吞付た酒ちや御吞ミやつたかよふおりや

る 酒と申物ハ悪物て御さる 酔てハ前後をも覚ませぬニ仍て急度思いとまり升た 男 さりなから誰やらかそふ

言たか夜前もよい機嫌て有たとやら言たそよ シ されハ其事て御さる 迎も留るならハ今夜呑納メに呑と申て無理に

す、められて是悲のふ被下ました 今日からハ弓矢八幡たふる事てハ御座りませぬ 男 されハ其方の心任せちややれ

夫に付まして夜前此方へおなわが参たと申 宿にわ金法師か泣升るに依て迎に参升た 男 ハテナ事をおしやる

こちへハ来ぬか シ 酒ハふつくたへ升まい程に有様に被仰て被下 男 酒ハお主の勝手におしやれ 娘ハこちへ

ハ来ぬかノ シ イヤく此方へ参らいてとれへ参りませう 金法師か殊の外泣升るとふそ御戻被成て被下 女 金

法師か泣まするか 男 シカシ今ノハ女共か声てハ御さらぬか 男 いかなく娘ハこれへハ来ぬそ 女 女男ノ側エ行キ

シカく 男 くとい事をおしやる 娘ハ是へ来ぬと言に シ ホウ御髭にちりか御さる 男 過分におりやる

酒ハ急度たへ升まい程にとふそ御戻被成て被下 男 酒ハ御呑ミやるふと御呑ミやるまいと其方の勝手におしやれ 娘

ハ是へ来ぬそや シ 七重のひさを八重におりまして御佐を申升る程にとふそ御戻被成て被下 女 あの様に言わせら

る程に最早堪忍のさせられる 此内男両袖ニ而女ヲ隠ス 女ヲニラミイロく仕方アリ エくとい 娘ハこちにハ居ぬそや シ 宿元にハ金法師

か泣て居り升る 女 タツテ男ノ前より 女 のふく金法師か泣升るか シ エイ女共早う戻らしませ 女 心得升た

ユコヲトスル男二人ノ中ニ居テ女ヲ 女 ヤラヌヨヲニスル女をツキタラスタ、シワキ柱ニテ 男 ヤイそこな奴 最前言葉をつこふて置たてハないか 女 いか親子の中ても恥

かしうハ思ハぬか シ ムイテ 此上ハ娘かいのふといふても某かやらぬそ シ イヤ爰な者か 人か舅ちやと思ふてた

まつて居れハほふりやふかない 是非共つれて行ねはならぬ 男 とふあつても遣る事ハならぬそ シ 扱く悪ひ

奴の 男 是ハ如何事 男 女共足をとれく 女 心得升た 男 ちやつと来イく 女 心得ま

した 男 ヤイく親を此様にしおつて祭りに呼ぬそよくく 女 心得ま

男 心得升た 男 心得ま

男 心得升た 男 心得ま

男 心得升た 男 心得ま

男 心得升た 男 心得ま

男 心得升た 男 心得ま